

た認識の進歩として出現するのではなく、あたかもそれまで世界を見るために掛けていた特定の色の色眼鏡を外し、別の色の色眼鏡に掛け換えて世界を見直すのと同じような認識の転換として起きると述べたのである⁸。

ストロースにせよクーンにせよ、人間が自分の属する社会の地域的空間的制約または歴史的時間的制約を持った世界観に基づく一定の価値判断に立って、いわば色眼鏡を掛けて世界を認識することは避け難いという点を、まず認めている。その上でそうした色眼鏡を掛けることがただちに「客観性」を欠いた誤った認識を引き起こすわけではないことを主張する。そこでは地域によって、あるいは時代によってさまざまな色眼鏡を通して見える世界像に違いが生じるだけで、そのどれが認識においてより「客観的」で正しく、どれがより「客観性」を欠いた誤った認識かといった優劣を決定し得る一義的基準は存在しないとしたのである。

この点をより平易に言えば、たとえば七色の色彩を見分ける人間と、紫外線、赤外線までを含め十色の色彩を見分ける動物とを比較して、人間とその動物のどちらの世界像がより「客観性」を帯びているかを決定し得る一義的基準は存在しないということと同じである。

ここで重要なことは、人間が特定の目的論的意識を持ち、それにともなう一定の価値判断やイデオロギーに彩られた世界観——すなわちあらゆる世界観は目的論的価値判断によって成立する——を持ったとしても、それだけでその人間の認識が「客観性」を欠くと断定することはできないという点である。言い換えれば、人間の世界観は地域的・歴史的状況の制約を多少とも受けて初めて成立するのであるから、その「客観性」は相対的なものでしかあり得ず、絶対的な「客観性」を持つ世界観は存在し得ないということでもある。

(3) 「人間中心主義」の目的論と近代科学の誕生

ところで以上の点に関連して、もう一点重要な問題に触れておかねばならない。

確かに人間の世界観は時代を越え、地域を越えて目的論的価値判断やイデオロギー（眼鏡を掛ける）をともなっているが、にもかかわらず西欧近代科学の成立以前には、その目的論は必ずしも「人間中心主義」的な目的論ではなかったという点である。言うまでもなく諸々のアニミズムに始まり古代ギリシャの汎神論を典型とする世界観は、自然世界との融合調和を基軸とした「自然中心主義」を特徴とするが、この世界観は自然及び自然と融合した人間からなる現存世界（世俗世界）そのものを、価値ある目的の主体として肯定する。それゆえにこの汎神論を背景として世俗世界の王者となった皇帝は、たとえば中華帝国では天命（現存世界の目的）を担った天子と見なされることになった（天人合一論）。日本の古代天皇制もまたこの「天人合一」を特徴としている。この点は西欧における古代ローマ皇帝も同様のものがあつた。

つまりそこでの目的論は自然世界そのものと、自然世界と融合した人間とから構成される現存世界が担ったのである⁹。人間は自然世界の一部として常に自然の内部にあって、自然との共生を前提とした「対話」を欠かさなかつた。

ところが中世ヨーロッパに至って唯一神信仰を背景に、世俗権力の中心がローマ法王（教皇）に移行して法王権が確立するや、状況は一変する。法王権の下では、自然世界と自然の一部である人間世界とからなる現存世界あるいは世俗世界は価値なきものとなる。そしてそれゆえに世俗的皇帝権力に代わって超俗的な聖なる教会こそが世俗世界を支配すべきものと観念されるに至る¹⁰。ここでは当然、唯一神にして創造主たるエホバと、その被造物である現存世界（自然世界+人間世界）とが区別される。それゆえにまた世界の目的論は、それまでの「自然中心主義=現存世界中心主義」にかわって「(唯一) 神中心主義」的な教会と法

王こそが担うことになった。

しかしここには本来、超俗的で聖なる内面精神的存在であるはずの教会が、やがて内面的超俗世界を支配するにとどまらず、かえって外面的世俗世界（自然世界+人間世界）をも支配するという自己矛盾を生むに至る。そしてこの自己矛盾こそ、次第に教会自身の神聖性、超俗性を衰弱させ、本来内面権威的にこそ支配しうるはずの人間の内面精神世界を外権威的に支配するという抑圧を引き起こすことになった。またその結果、ルター、カルバンらの宗教改革を呼んで自壊の道を歩むことになる。かくて「神中心主義」は潰え、次の「人間中心主義」を生み出すことになったのである¹¹。

近代西欧における「人間中心主義」はこうした経緯から誕生したが、それはとりわけ近代西欧科学の中に色濃く現れることになった。もともと中世における「(唯一) 神中心主義」は「(唯一) 神こそがすべての被造物（現存世界=自然世界+人間世界）を人間に奉仕すべく創造した」とする観念をともなっていたが、「人間中心主義」はこの観念のなかから神を除去し、これにかえて人間を優越視して被造物（現存世界）の中心に、すなわち「神の座」に据えることによって成立した。この時人間世界が現存世界から抽出され、神の座に就くのである。つまり「中世から(唯一) 神の超越性を除去すれば近代が現れる」というわけである¹²。

(4) 「科学実験」の目的

このようにして登場した「人間中心主義」は、近代西欧科学の根底を支えるものとなった。それは現存世界の中から、人間世界を自然世界と区別し抽出した上で、人間が自然世界を支配するいわば「神の座」に就く要求として現れる。この時、科学の対象（客体）としての自然世界と、科学の主体としての人間が明確に分裂することになる¹³。この主客の分裂のゆえに、近代西欧科学の

科学実験の目的は自然世界に対する単なる認識=観察（ウォッチング）自体に置いて、自然世界の模倣を試みるものではなくなった。

すなわち科学実験の目的は、自然世界の認識、模倣というレベルを越えて、科学の対象となった自然世界を、「神の座」に就いた人間の計算（目的論的価値判断）によって組み立て直すこと、再構成し直すことにこそ置かれるようになったのである。科学実験における自然界の認識=観察やその模倣は、それ自体に目的があるのではない。あくまで科学実験を通じて自然界の再構成のための設計図を描くのに必要となる情報・資料を提供する点にこそ目的があるのである。

実験室が外部の生^{なま}な自然世界自体の時間・空間と区別された人為的な内部の時空を形成し、それゆえにまた外部の自然界から隔離された「密室性」を特徴とするようになったのもこのゆえだった。

こうした密室的な実験室の問題としては、差し当たり次の二点を指摘し得る。

第一の問題としては、実験室の中では自然界の一部を切り取ってこれに人為的な再構成を加えるため、本来自然界では生じ得ない変化変形も起きる可能性を持つ点を上げ得る。そのような変化変形が外部自然界の生態系循環にとって好ましいものかどうか、生態系循環を崩す危険性については、何ら保障がなく、この点では実験者の主観的な倫理のいかんに一方的に依拠するほかはない。

第二の問題として、実験者の人為的な再構成により変化変形させられた自然の一部が、実験者である人間に反作用による影響を及ぼすことがないよう、実験室は厳格な統御によるシールド（shield 防御の隔離壁）を設けているという点にある。ここでは実験者である人間と実験対象としての自然の関係は、実験者から対象への一方向的な（unilateral）再構成の働きに限定されており、現存世界で通常起きる双方向的（bilateral）相互作用（人間と自然の対話）の関係は働かないように統御される。